

---

# 魔法少女リリカルなのは～僕は 私は 君を～

十六夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 僕は 君を

### 【Nコード】

N2372BA

### 【作者名】

十六夜

### 【あらすじ】

少年が少女と出会ったことで全てが狂いだした・・・狂いだした歯車はどこへ向かうのだろうか・・・さあ、物語の序曲を始めようじゃないか

## プロローグ(前書き)

はじめまして、とりあえずこの作品は作者の処女作です。なのでいろいろと変な部分があります頑張りますので温かく見守って下さい  
(笑)

## プロローグ

「はあ、はあ、はあ」

少年は走っていた。

その少年は真っ赤に染まっている。それは血だ。決して自分のではなく今まで切ってきた人間の血だ。

「居たぞ！追え！」

「ち、もう見つかったか。何人で探しに来てんだよ」

少年は走るのを諦め逆走し追っ手に向かって行った。追っ手は少年に銃を乱射してきた。少年は帯刀していた刀を抜刀し迫ってくる銃弾を切り落としながら接近し相手の銃を切っていた。

「退け。命を取るつもりはない。これ以上戦闘を続けるのなら次は首を切り落とす」

少年は静かな声で言った。しかし相手は攻撃を続けており言葉は無意味だった。

「馬鹿が・・・」

少年はためらうことなく刀で次々に敵を切っていた。

最後の一人を仕留めて少年は刀を鞘に戻した。辺りは血が飛び散っており死体がたくさんあった。

「ふう……」

少年がため息をすると

「君にしては手間取っているじゃないか」

ボロボロのローブを纏ったゆらめく影のような人物が突如現れた。

「何だい。カール」

「ただ単に親友の姿を見に來ただけだよ。それとマルグリットが早く君に 会いたがっているよ。ああ、まったく妬けてしまうな」

この芝居がかかった言動を他の人間は不快と感じるが少年はそこまで感じてはいなかった。底知れぬ印象があるのは間違いないだろうとしか思っただけだった。

「またいつか会いに行くよ。彼女が必要になるからね」

「マルグリットは君と一緒に居ないと不安定だ。君しか見ていない」

「俺が行くまでカールと一緒に居てくれ」

そう言っただけ少年は歩き始めた。

「これからどこに行くんだ？」

「さあね。ぶらぶら旅をして当分休息をするよ」

「ああ、そうか。面白いことが起きるのを期待しているよ。それでは良い旅を」

カールと呼ばれた人物は消えていった。

「さて、どこへ行くかな」と

少年は暗闇の中へ姿を消した。

## 出会い（前書き）

短いかと思いますが頑張りました。

Dies 勢は少しずつ出てきますが本格的に活動するのはまだ先です。

## 出会い

海鳴市海鳴臨海公園でとある少年はベンチに座っていた。

「ここは平和だな・・・」

太陽も落ちてきてる夕方、少年は海を見ながら黄昏ていた。周囲を見回すと遊んでいた子供たちも門限があるのだろうか、帰り始めていた。そんな中、帰る気配もなく少年と同じくずっとベンチに座っている少女がいた。他の子供たちが居なくなっても少女はまだ座っていた。少年は少女がなぜだか気になり近づいて行った。

「君は帰らないのかい？」

「えっ？」

少女は突然話しかけられて驚いていた。顔を上げると自分と同じ髪の色で肩まで伸びており中性的な顔立ちの人物だった。

「皆帰ってるよ。君はどうするの？」

「家に帰っても誰もいないからいいの……」

「そうか」

今度は逆に少女が少年に質問した。

「あなたは帰らなくていいの？」

「僕は旅をされていてね、たまたまこの町に来たんだ。だから帰るところはないよ」

「だったら私の家に来ない？」

「出会ったばかりの人間を家に入れようとするなんて何考えてんだ」

「ねえ、いいでしょ」

「うっ」

少女は少し涙ぐんで言い少年は心を揺さぶられた。

「ふう、分かったよ。行こう」

「やった！」

少女は涙ぐんでた顔から急に満面の笑みに変わった。

「あっ名前まだ言って無かったよね？私は高町なのは。あなたは？」

「僕は………ナギサ………ナギサ・ライヒハートだよ」

「よろしくね！ナギサくん！」

「ああ、よろしく。なのは」

なのははナギサの手を取って歩きだした。

これが二人の出会いだった。

## 出会い（後書き）

次回、黄昏がでるかも？

てか黄昏が病んじやっていいのかな？

## キャラ設定(前書き)

物語の進行によって詳細が追加されていきます。

## キャラ設定

名前：ナギサ・ライヒハート

年齢：9歳「1期開始時」

性別：男

一人称：僕、感情的になつたり黒円卓メンバーなどに対しては俺

髪型：神呪神威神楽の天魔・夜刀の髪型、時々髪を結ぶ「ベアトリ  
スみたいな感じ」

髪の色：オレンジに近い茶髪かな。まあなのはさんの髪の色と同じです。

瞳の色：赤

顔：中性的、ぶっちゃけ練炭です

術式：永劫破壊「エイヴィヒカイト」、ミッドチルダ式

聖遺物：罪姫・正義の柱

武装形態：人器融合型

位階：？

魔力光：水色

デバイス：？

魔導師ランク：？

使用武器：なんでも可、特に刀剣類は得意、体術もできる

特技：料理、裁縫、洗濯、掃除など主婦スキルを持つ

黒田卓メンバーとは基本誰とでも話せる。ラインハルト、メルクリウスとも普通に話せる珍しい人物。

皆に忘れがちな「形成（笑）さん」の存在も忘れないが時々忘れる。中性的な顔立ちのため女性に間違われることがあり本人はそれを気にしている。

争いや面倒ごとは苦手であり避けようと努力をするものの何故か関与してしまうことが多い。

高町家一家にお世話になるが女性陣には勝てなく女性の服を着させられたりされ、立ち向かうも精神的ダメージを負って帰ってくる。

マリイの愛が重すぎて悩みの一つである。

基本戦闘は刀剣類か聖遺物。デバイスはあまり使用しない。

キャラ設定(後書き)

こんなもんですかね

黄昏の歌（前書き）

なんかもつまリイじゃなくね・・・

## 黄昏の歌

「血、血、血、血が欲しい。

ギロチンに注ごう、飲み物を。ギロチンの渴きを癒すため。

欲しいのは、血、血、血  
「血」

黄昏の浜辺で少女が歌っていた。断頭台で歌われる血のリフレインを。  
それは真っ白な布一枚をドレスのように纏った金髪の美しい少女だった。

「血、血、血、血が欲しい」

彼女の白く美しい肌には似合わないものがあつた。首にあつた赤い  
斬首痕、ギロチンの痕が。

「欲しいのは、血、血、血」

「血が欲しい」

誰も知らない讃美歌を歌い続けていた。

「ナギサ・・・」

ナギサのために歌ってるんだよ

なのに・・・わからないよ  
「

少女は歌うのをやめ、ぽつりとつぶやいた。緑の瞳から光が消えていく。

「なんであの女の子が気になったの？」

なんで話しかけたの？

なんであの女の子について行くの？知らない子でしょ？

なんで手をつなぐの？私がいつでも手をつないであげるよ

なんであの子の家に行くの？ここにきてよ

なんで？ネエ、ナンデナノ？

ナンデ？ナンデアノオンナノコトイッショナノ？

ワタシトイッショニイタホウガタノシイヨ」

少女の発する言葉だけがこの黄昏の浜辺を支配していた。

「私とずっと一緒に居てくれるって言ったのに・・・」

綺麗だよって言ってくれた。愛してるって言ってくれた。

ねえどっして？なんでなの？あの女の子がいけないのかな？

あの女の子の血を注げばいいのかな？」



ワタシハアナタヲコンナニモアイシテルヨ、エイエンニ

黄昏は今日も歌い続ける。愛してる人のために。

黄昏の歌（後書き）

ヤンデレの勉強してきます！

黄昏の思いを受けた人物は・・・(前書き)

今日は成人式ですね！

成人された方おめでとございます！

作者はまだ成人してないです・・・

黄昏の思いを受けた人物は・・・

「うあっ！・・・はあ〜」

ナギサは布団から突然起きた。

「またマリイか。あんな夢の中で見させられたら安心して寝れな  
いって。」

てかあれホラーじゃないのか・・・いつか殺されそう・・・」

「んっんっすっすっzzzz」

ナギサの隣には少女が寝ていた。高町なのはである。なぜかという  
ところは彼女の家である高町家だ。

そして彼女の部屋、そしてベッドで一緒に寝ていたからである。

彼女に連れられて一緒に生活して一週間、だいぶここの生活には慣れてきた。彼女の家族の話もそれなりには聞いて父親である高町士郎が事故で入院しているなどの事情は分かった。高町士郎と病院で会った時はお互いを警戒しあった。なんせ血の匂いがお互いの体に染みついていたので。

「ナギサ君・・・と言ったね」

「はい、そうですよ」

「君は人を殺したことがあるね？それも一人、二人のレベルじゃないもつと多くの人を・・・」

「ええ、でも安心して下さい。危害は加えませんし、何かあったら御家族は僕が守りますよ」

「信じてもいいんだね？」

「危害加える気ならもうとっくにやってますよ。」

それよりあなたは裏の世界から足を洗った方がいいんじゃないんですか？

ずいぶんと体のダメージが大きいですか？」

「もう止めるつもりだよ。家族にも迷惑をかけたしね。なのはが信用してるんだから君は大丈夫だね。」

ではナギサ君、家族を頼むよ」

ナギサは病院での会話を思い出していた。

「この会話は絶対病院でする話じゃないよな・・・」

なのは足が布団から出ていたので足を入れナギサも布団の中に入った。

「当分ここで生活をするか。何も起きなければいいんだけどな。」  
「応みんなにでもいつか会おう。」

マリイにも会いに行かないといけない。彼女は純粹でいい娘なんだけどね。

でも夢で出てきた状態だと会うとまずいことになりそう」

とぶつぶつ言うのだった。

「ナギサ君、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

なのはが起きてしまった。少し長く思い返していたのか。

隣のなのはに優しい笑みで見つめながら

「おやすみ、なのは」

「うん、おやすみ」

お互いそっとつぶやいた。

場所???  
時刻????

????「おおオオオオオイ、ナギサは日本に来てんじゃねえエエエ  
エのかよ!?!」

????「ええ、来ているはずですが・・・てか声大きいのでもう少し  
音量下げてください」

????「彼には少し休息が必要だ。休ませてあげるべきだ」

????「ああん? いい加減奴とは一度殺りあいてえんだよ!」

????「まあまあ、いつかは会えるんですから勘弁してやって下さ  
い」

女性は男性を抑えるよう言葉を発した。

????「僕はもう行くよ」

叫ぶ男性とは別の男性が歩きだした。

「????」どこに行くんだボウズウウ？」

「????」妹を迎えに行くんだ」

「????」あ、待って下さい！私も行きます！」

女性は男性について行った。

「????」ああアアア！クソがつ！」

三人の音がそれぞれ足音になって消えていった。



黄昏の思いを受けた人物は・・・（後書き）

????の人物三人分かる方は分かると思います。

まあいつかまた出てくるので。

序曲の始まり（前書き）

ちよつと作者は疲れているので勘弁して下さい。> B ( ) B <

## 序曲の始まり

カサカサカサカサ・・・

暗い森の中でうごめく影があった。形からして人間では無いだろう。ましてこの世界に存在するかは怪しい物体が駆け巡っていた。

怪しい物体は同じその場に居るとある人物に向かって進んでいるようだった。

「ハアハアッ！」

その人物は息が上がっている。

体中、傷だらけで腕からは血が流れていた

その人物は小さな赤いビー玉のような物を取り出して自分の前にかざし、翡翠色の魔法陣を展開した。

「くっ！」

怪しい物体は猛スピードで迫ってくる。

「ジュエルシード封印！」

翡翠色の魔法陣と怪しい物体がぶつかり合った。

怪しい物体は跳ね返った。一緒に周辺に黒い破片みたいなものが落ちて来た。

たぶん怪しい物体の物だろう。

怪しい物体は這いずりながら森の暗闇の中に逃げる様に帰って行った。

「逃がしちゃった。追いかけて……なく……ちや……」

魔法陣を展開していた人物はそう言い倒れていった。

『どうか、僕の声聞いて。力を貸して。魔法の力を……』

その人物は光に包まれていった。

光が消えるとそこにはフェレットに似た動物と赤い光輝く玉があった。

ある少年は窓から光の方角を見ていた。

「なんだこの感じは・・・」

不思議な感じを受け、ナギサは顔を渋らせた。

戦闘を行ったことは分かった。そして魔力を感じたので魔法が関わってるのだろうと考えた。

「なんでこんな所で魔法が？俺を狙った戦闘ではないようだが・・・」

自分を狙ってるわけではないので少し安心をした。そこまで脅威を感じるレベルでもない。

しかしこれは何かがおこるのではないかと思った。そこまで干渉しようとは思わないけど。

「なあカール、これもお前の劇場での出来事の一つなのか・・・」

友である水星へ言葉を発した。

「まあお前の思い通りには俺は動かないよ」

そう言い彼は窓にカーテンをして窓から離れて行った。

）  
）  
）  
）  
）  
）

「んんんっ」

ベットから携帯の音楽が鳴っている。ベットの人物は携帯を取ろうと手を動かしていた。

しかし携帯はベットから落ちて床に落ちた。

ベットの人物はやっと携帯を取り音楽を止めた。

「ん〜ん〜なんか変な夢見ちゃった。あれ、ナギサ君はもう起きてるのかな？」

声を発した人物はもう一回背伸びをした。

高町なのはの起床だった。

「ナギサ君起こしてくれてもよかったのに〜」

文句を言いながらなのはは部屋を後にした。

場所：????

時刻：????

????「これは・・・」

????「魔法・・・ですか？」

????「ええ、そのようね。まっ私より格下のようだけど」

????「ケツ、いけすかねえな」

????「私たちには危害が無い様ですが」

????「別に戦闘だけだから大丈夫よ」

????「あなたがそう仰るなら大丈夫でしょう。しかし・・・」

そう言いその人物の優しそうな雰囲気が一変し冷酷な感じを出した。

「???」後に私たちの障害となるなら排除しなければなりません

「???」そんなときゃ、俺が行くぜ。この国は退屈だア

「???」これも副首領閣下の茶番なのでしょうかね

「???」あゝまったく、やんなっちゃう

「???」ともあれは当分様子見です。二人ともいいですね?

そうして三人の会話は終了した。

序曲の始まり（後書き）

作者「魔砲処女ドジツ子ザミエルをなのはと戦闘させたいな」

???「ほう、貴様後で闘技場に来い」

作者「!!!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2372ba/>

---

魔法少女リリカルなのは～僕は 私は 君を～

2012年1月12日02時01分発行